

Title	生物文化多様性による野生生物と社会の関係分析の提案 : バイラテラルアプローチ
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	第20回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集: 26-27
Issue Date	2014-11-02
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16898
Rights	Copyright (C) 2014 「野生生物と社会」学会. 敷田麻実, 第20回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集, 2014, pp.26-27.
Description	

生物文化多様性による野生生物と社会の関係分析の提案：

バイラテラルアプローチ

企画者：敷田麻実（北海道大学）

1. 趣旨

従来、野生生物は供給サービスを生み出す「資源」であった。そして食料や毛皮をはじめとする多様な製品を製造するために野生生物を消費してきた。しかし、農耕や家畜生産などが一般化し、野生生物を資源として直接消費対象としない社会に移行すると、野生生物は保全や管理する対象に移行した。それと同時に、生態系サービスの「供給サービス」から「文化的サービス」の消費が生み出された。また保全や管理の対象となった野生生物との関係は、直接消費を介在しないので、それまでと異なる関係が生じた。

こうした文化的サービスの存在がありながら、野生生物の管理に関しては、生態学に基づく科学的な議論や研究によって根拠づけられた政策が主流である。また、地域や市民活動も含めた関係者が管理に関わっているが、獣害対策など直接的な管理に関心が集まっている。野生生物と関わる文化面の研究は、民俗学や環境社会学でも議論されてきた。しかし、文化的サービスを前提とした管理は十分考察されてこなかった。

そこでこのセッションでは、野生生物と私たちの社会の関わりを、文化的サービスの利用の視点で再度分析し、生態学的なアプローチだけではなく、文化的なアプローチも取り入れた、野生生物保護管理のための「生物文化多様性アプローチ」を提案し、議論したい。

2. 講演者と講演タイトル

- ・敷田麻実(北海道大学)
「趣旨説明」
- ・敷田麻実(北海道大学)
「生物文化多様性アプローチによる野生生物管理のフレームワーク」
- ・福山貴史(北海道大学(大学院))
「生態系サービスからみる「負の存在化」した野生生物の資源化プロセス」
- ・宮下健太郎(北海道大学(大学院))
「現代文化における生物多様性の活用：ポケモンと生物多様性に関する分析」

【コメンテーター】

- ・湯本貴和（京都大学）
- ・新広昭（石川県）

3. 講演要旨

「生物文化多様性アプローチによる野生生物管理のフレームワーク」

現代社会における野生生物は、生態系サービスの供給サービスとしての資源ではなく、鑑賞対象やイメージとしての利用など、文化的サービスとして消費されることが多い。しかしその一方で、野生生物の管理は、生態学に基づく自然科学的研究を基礎に進められることが多く、文化的サービスの利用の拡大がありながら、管理には生態学的なアプローチがとられるという不均衡が認められる。例えば、知床半島のヒグマの観光資源化による弊害では、個体数管理による野生生物管理が進む一方で、ヒグマの持つ「文化的サービス」を利用する資源化プロセスが発生している。そのため自然科学的アプローチだけでは野生生物を管理できない状況となっている。

そこで、新たな野生生物管理のアプローチとして、生物多様性と文化多様性の相互作用を前提に、文化面と生態系の両方の要素を加味し、野生生物の資源化プロセスの管理も含めた新たな枠組み提案を行うためのフレームワークを提起する。

「生態系サービスからみる「負の存在化」した野生生物の資源化プロセス」

獣害対策などが深刻化する現代社会では、野生生物は駆除対象にされる傾向が見られる。特に農林業被害や生態系破壊のような被害状況は、メディアに公表されるケースも多い。こうした生態系バランスの喪失は、生態系サービスのうちの「調整サービス」の問題だと考えられる。吉田（2013）は、鳥獣被害などのマイナスの影響を人間に与える生態系サービスを「負の生態系サービス」だと主張しているが、「負の存在化」した野生生物と社会の関係の再構築が必要である。また、正の存在として再認識するには、野生生物の価値を資源として再認識する必要がある。

そこで本発表では、北海道道東地区のエゾシカの資源化を事例に、負の存在化したエゾシカが、地域関係者の文化的・科学的な2つの価値付け方法によって、その資源価値が向上したプロセスを分析した。このプロセスは、さらにアプローチの違い（ブランディング・マーケティング）で2つに分類可能であり、以上の4つの要素を生態系サービスとの関連で考察し、資源化プロセスにおける文化的サービスの意味と効果について議論する。

【参考文献】吉田謙太郎（2013）『生物文化多様性と生態系サービスの経済学』，昭和堂，京都市，270p.

「現代文化における生物多様性の活用：ポケモンと生物多様性に関する分析」

伝統文化や言語多様性の維持に対する生物多様性の役割が認められはじめ、生物多様性の重要性は社会的にも増している。同様に、現代文化であっても、野生動物や植物を模した様々なデザインがみられるように、生態系がないと生み出せない「文化」であると考えられる。しかし、こうした現代文化と生物多様性との関係は、伝統文化と生物多様性への言及に比較してほとんど言及されてこなかった。そのため、現代文化は社会的にも、経済的にも重要視されながら、生物多様性の維持の理由とはなりにくかった。

そこで、生物多様性と現代文化との関係性を示すために「ポケットモンスター（略称：ポケモン）」を事例として両者の関係の分析を試みた。ポケモンは空想上の存在だが、実在の生物がモチーフとなっている例が多い。そのため1996年の発売から18年間で生み出されたポケモン(719種類)を対象に、モチーフとなった生物を明らかにし、ポケモンと生物多様性との関係を分析し、現代文化に対する生物多様性の重要性を議論する。